Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

〈アイデンティティ〉の現在 ： 自己物語論の視点を中心に

津田, 翔太郎

(Citation)
社会学雑誌,33:144-162

(Issue Date)
2017-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041387

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041387

〈アイデンティティ〉の現在

――自己物語論の視点を中心に――

津田　翔太郎
人文学研究科博士課程

人文科学における〈アイデンティティ〉に関する諸論は、凡そ八〇年代より、従来主張されてきた一貫性や統合性に代わって、多元性や解離性が指摘されるようになった。

我が国においても、九〇年代半ばからこの「アイデンティティ多元論」が積極的に受け入れられるようになり、現在に至るまで、行為者の自己認識のあり方や様々な文化現象を説明するのに有効であるとされてきた。

一方で、昨今においては、「〈場〉から疎外された〈本当の自分〉を切望する自己」など、多元論では十分に捉えきれないようなアイデンティティのあり方もまた着目されている。本稿においては、そのような視座について、「自己物語論」を通して発展的に論じる事で、統合論／多元論に必ずしも回収されない、〈アイデンティティ〉を巡る新たな分析枠組みを検討したい。

一　社会意識の変容
―選択的コミットメントの前景化―

「アイデンティティ（自己同一性／自我統一性）」なる言説は、エリク・H・エリクソンの『自我同一性』（エリク・H・エリクソン著、小此木啓吾訳編、一九七三）が小此木啓吾により邦訳された事を機に、我が国において知られるようになった。以降、「自己に対する〈他者〉の心象を踏まえた上での、一貫性を持った肯定的な自己認識」といった意味合いにおいて、広く一般に認知されていく事となった。

昨今においては、そのような意味合いを前提としつつも、A・ゴフマン、バーガー／ルックマン、S・ホール、J・バトラー、Z・バウマンらに緩やかに共有された「自己の構成性」が参照・再編される事で発展を遂げてきた構成主

義アプローチ[1]が、「アイデンティティ多元論」の理論的な支柱となり、大きな潮流となっている。

上野千鶴子や浅野智彦らは、アイデンティティ多元論、すなわち「非本質的、非統合的、断絶的な行為者の自己認識のあり方」が、とりわけ九〇年代以降の我が国における行為者のアイデンティティのあり方を適切に説明できるとする（上野千鶴子編、二〇〇五、『脱アイデンティティ』、浅野智彦編著、二〇〇九、『リーディングス　日本の教育と社会　第一八巻　若者とアイデンティティ』など）。例えば浅野は、「解離性同一性障害」の症例が八〇年代以降増加すると共に、広く社会にそのイメージが共有されるようになった背景として、人々の帰属する「場」及び「自己」のあり方が多元化した点を指摘している（上野編、二〇〇五、前掲書、浅野「物語アイデンティティを越えて？」八〇頁―八一頁参照）。

では、浅野や上野が前提としている、「多元的なアイデンティティを構成可能とする社会状況」とは、どのようなものなのだろうか。以下において、それを齎した社会意識、他者関係の変容について、概観的に記述する。

凡そ七〇年代以降、行為者が、他者関係を構築し、自己実現を追求する空間であった社会・文化的な集団（地域、家族、企業社会、古くは学園闘争などのイデオロギー集団、今日に通じるものであれば「オタク」[2]等の趣味趣向の共有に基づいた集団を幅広く想像されたい）が、「〈近代〉という高度成長に支えられた大きな物語」の終焉によって、「多様化、不可視化、等価化」を辿る事となった。これによって、①他者関係を築く上での効率化（多様化・不可視化への照応）、②文化的・社会的意味の消失による虚無感の埋め合わせ（等価化への照応）という動機のもと、特定の意味内実に依拠せず、偶有的・即時充足的な関係性である「選択的コミットメント」[3]によって、他者と関係を構築するあり方が、一般的となっていった（浅野編著、二〇〇九、前掲書、浅野「親密性の新しい形へ」、三浦展「消費の物語の喪失と、さまよう『自分らしさ』」、宮台真司「新人類とオタクとは何だったのか」、山田真茂留「若者文化の析出と融解」参照）。

また、批評家の宇野常寛の議論を参照すると、とりわけ〇〇年代以降においては、グローバリゼーションの進行、ネオ・リベラリズムの台頭、SNSコミュニケーション[4]の発展等を背景に、「〈他者的な〉関係、集団へ能動的に参与しなければならない」という規範が強くなっていた点も、「選択的コミットメント」前景化の一因として指摘できる（宇野常寛、二〇〇八、『ゼロ年代の想像力』参照）。

浅野は、この「選択的コミットメントの前景化」を前提としつつ、今日の若者は、自己存在に〝意味〟を与えるため、以下の四つのゲームを繰り広げるという（浅野編著、二〇〇九、前掲書、浅野「親密性の新しい形へ」、二〇二

頁―二〇三頁参照)。

①「本当の自分探し」という欲望を「親子」、「家族」、「恋人」など、親密な他者で埋める。

②超越的で普遍的な他者(典型的には「神」)で埋める。

③メディアを介した他者(例えば、ブランド・グッズの消費)で埋める。

④本当の自分などありはしないとし、複数の自分をそれなりの本当の自分と認識するようになる。

『これら四つのゲームは、単純に対立・並存しているというよりも、むしろある場面では互いに強化し合い、別の場面では拮抗し合いながら複雑な相互作用の内に存在している。それらは同じ一人の人においてさえもしばしば重なり合っているであろう。』(浅野編著、二〇〇九、前掲書、浅野「親密性の新しい形へ」、二〇三頁引用)

これらについて、第三のゲームと第四のゲームは「多元的アイデンティティ」と親和性が高く、浅野自身も、それら二者が今日では一般化していると捉えているように思われる。

このような若者の自己のあり方を「多元的」と評する議論が散見されるわけだが、一方で、本論の後半部で詳述する「〈本当の自分〉を切望する自己」(浅野編著、二〇〇九、前掲書、土井隆義「『個性的な自分』という強迫衝動」参照)のような「統合性の残余に縋る自己」には、殆ど理論的な焦点が当てられていない点に、留意する必要がある。

二 「自己物語論」の視座の導入

そのような、多元論では積極的に言及されてこなかった行為者のアイデンティティのあり方を記述するために、「自己物語論」に着目する。

自己物語論とは、社会学における方法論の一つであり、人文諸科学において八〇年代よりさかんに唱えられるようになった分析概念「物語論」に出自を持つ(浅野、二〇〇一、『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』、三七頁―三八頁参照)。

浅野によると、物語論は主に、八〇年代以降、歴史哲学、心理学・社会心理学、イデオロギー批判、臨床心理学という四領域において注目され、そのいずれにおいても、「〈体験〉は、何らかの恣意を孕む基点により、言語を媒介にして構造化される事で〈主体〉に認識される」という特徴が、理論的インパクトとして迎え入れられていた。それを支柱としつつ、「行為者の自己アイデンティティは〈物語〉によって構成される」とする「自己物語論」が、九〇年代後半以降、我が国の社会学において注目を浴びるようになった(浅野、二〇〇一、前掲書、三七頁―七三頁参照)。

この「自己物語論」は、従来のアイデンティティ多元論に包摂されない独自の理論体系を持っている。以下においては、浅野の議論に依拠しつつ、自己物語論独自の視座を見いだしていきたい[5]。

浅野は、自己物語論の特徴について、以下の通りとりまとめている。

(1) 自己というのはそれ自体で存在する客観的な実体ではなくて、現在の時点から自分の人生を振り返り、そこに見いだされた様々な出来事を納得のいくような形で時間軸上にプロット化した物語である。

(2) このプロット化は、他者（それが実在の他者であれ想定された他者であれ）に向けて物語るという形をとって行われる。

(3) 自己物語は、過去の自分（物語の登場人物としての自己）を現在の自分（語り手としての自己）からいったんは区別しながら、最終的には結末（現在および未来）において一致させるような構成を持つ（上野編、二〇〇五、前掲書、浅野「物語アイデンティティを超えて?」、七七頁―七八頁引用）。

(1) によると、自己物語論は、各プロットが無関連化しない限りにおいて、行為者が自己を「多元的に語りうる」事を認める。また、同時に自己物語論は、「物語る〈私〉」という、過去を遡及的に捉え、物語として成立させるメタ視点を配置するので、ある程度の一貫性・統合性もまた想定する。これら「多元性」と「統合性」という両義的な性質の内在を可能にする点が、自己物語論の特徴である。

また、(2) における「想定の他者」とは、「〈内在化された他者〉を通して対象化された自己」を指す。つまり、相互行為の前提条件としてのアイデンティティは、「他者にどう見られているのかという他者視点」を経由した「自己への語りかけ」によって構成された「自己イメージ」によって生起される、という事である（浅野、二〇〇一、前掲書、六頁―七頁参照）。自己物語論はこのように、①言語を用い、（想像の）他者を媒介した自分自身への語りと、②物理的な他者との相互行為による「二層の語り」によって、アイデンティティが構成されると考える。以上の事から、自己物語論は、「多元的でありながらも統合性を備える」と同時に、その構成要素として、想像的／物理的な「他者」を重視していると言える。

三　補論「再帰的自己」と自己物語論の相似性

浅野は、自己物語論とA・ギデンズの「再帰的自己」[6]概念の相似を指摘している（上野編、二〇〇五、前掲書、浅野「物語アイデンティティを超えて?」、七八頁参照）。

ギデンズは、「生活世界及び自己呈示の多元化に応じて、

自己アイデンティティもまた多元化する」というアイデンティティ多元論に対して、賛成の立場をとらない（アンソニー・ギデンズ、二〇〇五、『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』、秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳、二一五頁―二一六頁参照）。彼はそのような行為者を、「（もし仮に存在するならば）生活史の継続性に関する一貫した感覚を欠いた人々」として異化している（ギデンズ、二〇〇五、前掲書、五八頁―六四頁参照）。

彼の提唱する「再帰的自己」によると、〈行為主体〉が自己について解釈を試みた際、自己や他者に対して、それを一貫性・継続性を持った生活史として「物語る」事ができるとする。ただし、それを通した自己認識は、「再帰的近代」という磁場において、常に再解釈・再定義の機会に晒されるために、解離・断片化しない限りにおいて多元性が認められる（ギデンズ、二〇〇五、前掲書、五七頁―五八頁参照）。

このように、「再帰的自己」は、緩やかな多元性を許容しつつも、「再帰を可能とするもの（選択に先立つもの）」を想定するため、安易に自己の構成性を認めない。この「選択に先立つもの」こそが、自己物語論独自の視座でもある。ギデンズはこれについて明確な定義づけを行なっていないが、多元性を鳥瞰するものとしての「身体が日常生活に埋め込まれている感覚」を指摘している（ギデンズ、二〇〇五、前掲書、一一一頁―一一二頁参照）。

四　「すでに自己構成した語り手」

次に、ギデンズの議論を追う事によって明示された「選択に先立つ行為主体」を踏まえ、自己物語論の独自性に焦点を当てる。

前述のとおり、自己物語論において〈私〉は、「物語る私」と、過去を遡及的にふり返る事で立ち現れる「登場人物としての私」に一旦は分解され、選択に先立つ「物語る私」による構造化を通して、最終的には一致する。そのような過程を通して培われたアイデンティティは、過去の〈私〉の性質と現在の〈私〉の性質が必ずしも一致しなくとも、例えば、「多元性を含んだ私こそが私自身だ」、というような「多元性を前提にした上での統合的な自己」を、理論上は想定する事ができる。

しかしこれだけの説明に留まると、行為者のアイデンティティは結局、一体どの水準までが「物語的な自己」で、どの水準からがそうでないのか、ある程度明確な線引きが困難となる。そこで、以下においては、「選択に先立つ行為主体」に着目し、「例証」を通してその差異を浮かび上がらせる。

ある場ではオタク（①アニメが好き／②アニメが嫌い）

であり、ある場面では学校の生徒（③優等生／④不良生徒）である行為者がいたとして、他者、あるいは自己に対して物語る際、他者との相互行為の脈絡によって、自己のアイデンティティを、たとえイデオロギー的に対立していたとしても（①／②もしくは③／④）、あるいは、相互の脈絡が断絶していたとしても（例えば①／③）、それを「気にもとめず」、すなわち最重視する準拠対象における〝いまここ〟のメタ視点を志向せず、断片化した諸自己の「いずれも」自分自身であると認識するのであれば、それは「多元的自己」と言える。

このような断片化を自己物語論は認めない。なぜなら、一義的準拠点を持たず、「自己を場に応じて切り替え違和なく語る行為」は、「物語るいまここの〈私〉」が欠落しており、一冊の物語として破綻しているためである。この通り自己物語論は、多元的アイデンティティの概念図式である「言語を用いた自己への語りかけ、及び他者との相互行為→自己アイデンティティの構成」以前に、選択に先立つ「すでに自己構成した語り手（浅野、二〇〇一、前掲書、二〇〇頁参照）」を想定する。

この、「言語の取捨選択・構造化を可能にする語り手」の想定によって、〈私〉が緩やかに統合性を帯びるために生じる、場の要請に適応しきれない「〈私〉の困難」を浮かび上がらせる事ができる。

すなわち、「場に応じた自己変容」の立証を目的とした、「すでに自己構成した語り手」による自己内省及び他者への語りかけは、結局のところ、「外部要請に適応できないと認識している〝今ここの〟私」を前提としているので、「適応したという確証を与える視点を欠く」のである（浅野、二〇〇一、前掲書、一三一頁―一七三頁参照）。これは、発話そのもの、あるいは行為者の自己イメージを形成する心のおしゃべりと、その発話の真偽を支える視点とが同じ語り手に属しているために生じる（浅野、二〇〇一、前掲書、一五一頁―一五二頁参照）。

自己物語論は、このように、原理的に対象化できない「すでに自己構成した語り手」を想定する事で、アイデンティティが「緩やかに統合的」であるために生じる「変化への脆弱性」の説明を可能とする。その一方で、対象化できない（語りえない）ものこそが、場合によっては「変わりうる」可能性である事も示唆する。

五　〈アイデンティティ〉の可変性

自己物語論は〈語りえないもの〉を想定する。それは、『まさに自己物語のただ中に現れてくるようなものであり、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうようなもの』であり、それを隠蔽する事で人々

は日常生活を営んでいる（浅野、二〇〇一、前掲書、一五頁引用・参照）。浅野は、この「語りえないもの」を以下のように区分・定義している。

①「すでに自己構成した語り手」を想定するために、行為者が原理的に自己自身を対象化できないという〈物語の宙づり〉

②トラウマなど自己の心象に衝撃を与えたエピソードについて「対象」として切り離してみる事ができない〈沈黙〉

③自己物語の筋から逸脱するようなエピソードから成る「語りえなさ」を孕むという〈未決定なエピソード〉（浅野、前掲書、二〇〇一、一四頁―二〇頁参照）。

家族療法における物語論的アプローチは、これらに着目し、クライエントの物語の書き換えを行なう事で、生き難さを改善するという治療法を実践している（浅野、二〇〇一、前掲書、七五頁―七六頁参照）。この治療アプローチを要約すると、「セラピストが、クライエントと同一の地平に立ち、〈語りえないもの〉に着目する事で、自己物語の一貫性、全体性、包括性に亀裂を入れ、それを梃子にして物語全体の変容を促し、その物語をより生き易いものにする」というものである（浅野、二〇〇一、前掲書、九八頁参照）。

この過程を本論の文脈において記述するなら、対話を通して、行為者の「他者関係を上手く構築する事ができない」というネガティブなアイデンティティに亀裂を入れる事で、他者に開かれた自己構築のきっかけを作るという事である。それによって、「すでに自己構成した語り手」が変容し、「①言語を用いた自己への語り」、「②①によって生成された自己イメージを元にした他者との相互行為の意味内容」も、変化させる事ができるというわけである。

この変容について自己物語論は、行為者の「すでに自己構成した語り手」が、「物語る最中」においては「すでに自己構成されている」と定義づける一方で、その構成要素として「事後構成・対象化可能なもの（≒社会的に構築されたもの）」を認めるため可能になると判断する。これについて、G・H・ミードの「I（主我≒すでに自己構成した語り手）」と「me（客我）」概念を参照し、詳述する。

ミードは「自己」について、「I（主我）」と「me（客我）」によって構成されると捉え、それらの大部分は、先験的に獲得されているものではなく、社会的経験や他者との関係により規定・構築され、発達していくとする（ジョージ・ハーバート・ミード、［一九七三］二〇〇五、『精神・自我・社会』、稲葉三千男、滝沢正樹、中野収訳、一四六頁参照）。

「客我（me）」は、他者の視点（特定の個人及び一般的な他者の視点）を内在化・経由させる事で〈私〉について思念を巡らせ、〈私〉自身を認識する観念の事である。一

方「主我（I）」は、そのような「me」を反省的に捉える能動的観念である（ミード、［一九七三］二〇〇五、前掲書、一八七頁、二二七頁参照）。

ミードは、ある時点において「me」を対象化している「I」は、次の瞬間には「me」として「I」に対象化されるとする。つまり、ある時点において対象化できない「I」は、時間経過によって行為者に知覚・経験される「me」に変化すると捉える事ができるわけだ（ミード、［一九七三］二〇〇五、前掲書、一八六頁―一八七頁参照）。

「ある時点において対象化できない自己（I）」が、時間経過によって「対象化できる自己（me）」に（大部分は）変容するという事はすなわち、「すでに自己構成された語り手」の語りえない3要素（〈物語の宙づり〉、〈沈黙〉、〈未決定なエピソード〉）も、事後的には「語りうる（対象化し認識しうる）要素（me）」へ変容が可能である事を示唆している。従って、ミードに依拠すると、「自己」は原理的に、常に構築・再構築の機会に晒されていると言え、「すでに自己構成された語り手」も、理論的には（他者の介入を通して）脱構築可能と捉えられる。

「行為者自身の変容可能性」に焦点をおいた議論は、本論の趣旨とややずれるため、この程度に留めておくとして、「（対象化されうる）すでに構成された語り手」を想定する事によって、必ずしも、行為者は単純に、場に応じて自己をその都度構成しているわけではない点が示唆された。

これら「自己の可変性／脆弱性（緩やかな統合性）」を踏まえた上で、多元論では取り溢された、後述の「心理主義的自己」や「キャラ疲れ」に共感する若者の心性を、特殊的・病理的兆候を示すものではなく、ある程度一般化した心性として、捉え直す事はできないだろうか。

六　自己目的化した関係性、キャラとしての〈私〉の出現

本論は、前述の「社会環境の変容（アイデンティティ供給源たる社会・文化集団の多様化、不可視化、等価化に伴う選択的コミットメントの前景化）」について、大局的見地に立つ限りにおいて認めるが、ミクロ視点で行為者を観察した際、「本当にそのような場に適応し、多元的アイデンティティを有するようになったのか」、という問題意識を共有している。

以下においては、それに基づき、自己承認の拠り所としての「自己目的化した関係性」に着目し、そのような場で自己呈示方法として採用される「キャラ」概念をキーワードに、若者の他者関係及びアイデンティティについて、「自己物語論」に基づき分析を試みる。

土井は、「自己目的化した関係性からの疎外」について、

二〇〇八年に秋葉原で起こった連続殺傷事件[7]を起こした犯人Kの動機分析を糸口に詳述を試みている（土井隆義、二〇〇九、『キャラ化する／される子どもたち　排除型社会における新たな人間像』参照）。以下においては、安易な価値判断を避けつつも、その視座を参考とし、若者のアイデンティティのあり方を解く端緒としたい。

土井は、犯人Kが疎外感を感じ、敵視したのは、「企業家として成功したヒルズ族ではなく、同じ文化的トライブの中で、友人や恋人と上手く関係性を結び充実した現実生活を享受している人々」だったのではないかと指摘している（土井、二〇〇九、前掲書、八頁参照）。

社会学者・批評家の濱野智史曰く、彼がコミットメントを試みた匿名電子掲示板「2ちゃんねる」は、「見られる地獄」、「見られない地獄」[8]を自虐的な話題として消費する事により（〝ネタ〟として消費する事により、）コミュニケーションを接続するあり方が主流となっていた（大澤真幸、二〇〇八、『アキハバラ発〈00年代〉への問い』、濱野智史「なぜKは『2ちゃんねる』ではなく『Mega-View』に書き込んだのか?―二〇〇〇年代のネット文化の変遷と臨界点をめぐって―」参照）。「2ちゃんねる」においては、「容姿や社会的立場に不備があり〈見られる地獄〉、彼女も親友もいない〈見られない地獄〉」といった類の自己言及を、おもしろおかしく「ネタ」として書き連ねる事が、〝クリシェ〟となっていた。そのような「自虐」は、劣等感への共感に基づく「親密な関係性」が一義的に志向されているのではなく、「つながり合う事（共通の話題で盛り上がる事）」が優先されていたため、生じていたと考えられる。

Kは、「見られる地獄」、「見られない地獄」に共感を抱いてくれる「親密な関係性」を志向していたと考えられるので、2ちゃんねるを離れ、より匿名性が薄く親密性が高そうな別の匿名掲示板に書き込むようになった。しかし結局Kは、そこでも承認を得られたと実感できたわけではなかった（大澤、二〇〇八、前掲書、濱野「なぜKは『2ちゃんねる』ではなく『Mega-View』に書き込んだのか?―二〇〇〇年代のネット文化の変遷と臨界点をめぐって―」参照）。

オタク文化は、「共通の話題の提供」という点において、「2ちゃんねる」を中心とした電子掲示板と強い親和性がある。しかしそれは、今日において、コンテンツの大衆化に伴って、他のメイン・カルチャーと「等価なもの」として認識され、文化的意味内実・あるいは独自の共同性を求める対象ではなく、「コミュニケーションのネタ」として消費される側面が強くなっていた。

それを踏まえると、彼がなぜ（当時のオタクの象徴たる）秋葉原を犯行現場に選んだのかという問いにも、ある程度の説得力を持って解答しうる。つまり、Kは、同じ文化的

トライブにおいて、「意味内実」及び「自己目的化した関係性」双方から排除されたと感じたために、自身の存在を証明すべく、「かつてのホームベース」に「遺恨の爪痕」を刻み付けたのではないか。

今日、このような「意味内実が失われ、自己目的化した関係性が希求される場」は、「島宇宙化」[9]した形で、若者の生活世界を取り囲んでいる。

二〇〇九年に本田由紀らが関東圏の中学生数千人を対象に行なったアンケート調査においては、『「一緒に行動する友だちは決まっている」という項目に対して「とてもあてはまる」もしくは「まああてはまる」と答えた中学生は全体の八割を占め、特に女子だけでは九割近くになっている。』という結果が出た（本田由紀、二〇一一、『学校の気分』、四一頁参照）。

また、元お笑い芸人・コミュニケーション学者の瀬沼文彰も、首都近郊における、一六歳から二五歳ぐらいの若者約百数十人を対象に行なった聞き取り調査をもとに、若者の他者関係の「島宇宙化（閉じた関係性）」を指摘している（瀬沼文彰、二〇〇七、『キャラ論』、一四頁、二二頁参照）。彼は、その特徴を以下のように述べている。

『みんな面白い「お笑い系」のグループ、合コンなどが好きで、ルックスも整っている「イケてる系」グループ、単純に明るいグループ、あまりハデではない「ギャルじゃない系」などに分断されていることが、私の行ったインタビュー調査の中の何気ない会話で出てきました。これらのグループはあくまでも「自称」であるところがポイントです。』（瀬沼、二〇〇七、前掲書、一一二頁引用）

これを参考にすると、昨今の若者が形成する「島宇宙」は、ある程度、ファッションのジャンル、性格、共通の趣味等、何らかの「意味内実」に基づいて形成されていると考える事もできる。

しかし、同じく瀬沼によると、このような傾向はあくまでコミュニティ形成の「初期」に見られるものであり、上述の「緩やかな共通性」に基づいて一旦コミュニティが形成されると、微細な差異は「とるに足らないもの」として扱う努力が成員によってなされるため、コミュニティは外部環境と切り離され、「自閉」に向かう傾向がある、と指摘する（瀬沼、二〇〇七、前掲書、二六頁―二七頁参照）。

ゆえに行為者は、そのような自閉的コミュニティから一旦疎外されてしまうと、他のどこにも再参入できない。だから、たとえ性格や趣味や「ノリ」が合わないと内心で感じても、何とかして「みんなに合わせよう」と努力せざるをえなくなるわけである（瀬沼、二〇〇七、前掲書、二一頁―二六頁参照）。

以上の事から、彼・彼女らは、特定の島宇宙にコミットする傾向があるものの、（主として学校空間においては）

必ずしも様々な島宇宙を行き来し多元的に振る舞っているわけではないと言える。また瀬沼は、その関係性の特徴について、以下のとおり指摘している。

『若い世代は、流行していること、昨日見たテレビ番組、携帯電話の最近自分がはまっているゲーム、友人から来たメール、自分の両親の話、恋人ができたこと、もっと言えば、自分が傷ついたという事実があるにもかかわらず、恋人と別れたこと、実は恋人に浮気をされていたことを知ったことなど、様々な出来事は「ネタ」となり、それは友人との話の「タネ」として消費されることが多くなっていると、私は彼らの会話調査を通じて感じています。』（瀬沼、二〇〇七、前掲書、三五頁引用）

これを踏まえると、島宇宙におけるコミュニケーションの特徴として、特定の意味内実ではなく、「即時的な楽しさや面白さ」が求められるという傾向が指摘できる。土井は、このような関係性においては、他の集団への「差異化」を意識した「象徴闘争（P・ブルデュー）」が発動しにくい反面、内部の人間関係維持に向けて大きな労力が割かれるようになるため、「承認を巡る居場所争い」が、より意識的に行われるようになると指摘する（土井、二〇〇九、前掲書、九頁―一〇頁参照）。

それにおいては、他者と「相互行為における役割」が同一になる事が避けられると同時に（〈差異化〉）、グループの〝ノリ〟にそぐわない「逸脱」もまた避けられる（〈同化〉）（瀬沼、二〇〇七、前掲書、一二六頁参照）。

そのような、「差異化」と「同化」が同時進行する「居場所争い」の渦中において行為者は、独自の立ち位置（≒存在理由）を確保するために、「キャラ」を採用する。キャラは、『人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像』であるため、『錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化』する機能を持つ（土井、二〇〇九、前掲書、二五頁引用）。それを踏まえると「キャラ」は、「他者の〝他者性〟に目をつむり、当該コミュニティにおける「即時的コミュニケーション」の生成・維持を目的とし、マンガ・アニメの登場人物のように「分かりやすい人物像」として自己・他者を認識する枠組み」と定義づけられる（片桐雅隆、二〇〇〇、『自己と「語り」の社会学―構築主義的展開』、世界思想社、五六頁―五八頁参照）。

瀬沼の行なったアンケートにおいては、数十もの「キャラ」が対象者から挙げられたという。

例を挙げると、「お笑いキャラ」、「いじられキャラ」、「かわいいキャラ」、「まじめキャラ」、「ツッコミキャラ」、「無責任キャラ」、「あにきキャラ」等があり、性格に基づくものから能力に基づくもの、ポジティブなものからネガティブなものまで多岐に渡っている（瀬沼、二〇〇七、前掲書、七七頁―七八頁参照）。

これらから「キャラ」概念は、自我親和性、ネガティブ／ポジティブ、身体、性格などの属性を問わず、広範な文脈で捉えた方が、若者の自己認識に関するリアリティを捉える上で有効だと考えられる。これについて、土井によれば、場に応じた「キャラ」を上手く使いこなし、「ノリ（集合的沸騰）」を主体的に生み出し、どのような場においても「ウケ（笑い）」を取る事ができる人が、「コミュニケーション能力が高い」と見なされ、承認される機会が高まるという（土井、二〇〇九、前掲書、一五頁参照）。この傾向について、ある程度は、所得階層や趣味、あるいは運動能力や容姿なども「序列づけ」の決定因になると思われるが、価値観が多様化・等価化した現在においては、それらの「外部性」をそいだ「コミュニケーション能力」が相対的に重視されるようになっていると考えられる。この「序列」は、見かけ上は巧みにフラット化されるものの、実際は、各々のキャラにもある程度明白な序列が存在し、アイデンティティ承認を得られる人も限られている（瀬沼、二〇〇七、前掲書、一六一頁―一七六頁参照）。そのため、「キャラ」は、行為者自身によって能動的に決定されるというよりも、他者による外部圧力やその場の成り行きによって、知らず知らずの内に決定される場合もままあると考えられる。

以上を踏まえると、「自己の多元性」に着目するよりも、〈他者に認められたい本当の自分〉と、〈一義的にコミットする場における自分（キャラ）〉の同一性／解離のあり方に焦点を当てる事によってこそ、彼・彼女らの実存に接近できると思われる。

七　「自己物語論」による理論的検証

土井、本田、瀬沼は各々、「キャラ」が所属する場において、ネガティブな烙印を押された人々は、時に耐え難い苦痛を感じると指摘している（〈キャラ疲れ〉）（それぞれ前掲書参照）。例えば、「いじられキャラ」や「天然キャラ」といった（捉えようによっては）ネガティブな表象を伴う烙印は、他者からすれば場を成り立たせる「楽しさ」や「笑い」を担う役割に過ぎないとしても、当事者にとっては、「笑えない」「楽しめない」となってしまう事もあるという事である。もちろん、当事者自身が、「場における一時的なアイデンティティ承認」を得るために、自ら進んでそれを演じているケースもあるだろうが、そのような（他者操作的な）自己のあり方に苦痛を感じる場合も往々にして見られる（瀬沼、二〇〇七、前掲書、一六六頁参照）。そして「キャラ」概念は、このような「人格否定」を巧みに隠蔽する機能も有している（例えば「オタク」ではなく「オタクキャラ」とすればその攻撃性・劣位性は隠蔽される）。

アイデンティティ多元論に立脚するならば、普段一義的

に認識している〈私〉と場における〈ネガティブなキャラの私〉が解離していたとしても、二者の解離を割り切って認識し開き直るか、もしくは、当該の場において使用されている言説を巧みに読み込み、その場において優位なキャラを戦略的に構築する事が可能となるので、それほどまでに思い悩まないのではないだろうか。

しかし、〈他者に認められたい私〉と場における〈私〉の解離に悩む者が少なからず存在するという事は、アイデンティティ認識の上でその二者は何らかの連続性を帯びていると考えた方が妥当である。それを踏まえると、やはり、安易にアイデンティティの構成性を認めるのではなく、〈物語る私〉を前提とした、「〈承認されたい私〉と〈キャラ〉の解離」が、今問われるべき問題であると言えるだろう。

土井によると、今日の若者は、場の関係性に依拠した「外キャラ（今まで使用してきた〝キャラ〟と同義）」を演じる一方で、「内キャラ」という、感情操作を最小限に留める事ができる「輪郭がくっきりとした自己」を保持しているという（土井、二〇〇九、前掲書、三一頁―三二頁参照）。

外キャラは他者操作が介入するので、自身の望むキャラでいる事は容易ではない。従って行為者は、外キャラを含めた、他者への自己呈示戦略が意図通りにならなかった場合、「ダイヤの原石のように生来的な輝きを放つ自己」が内部に存在すると認識するようになる（浅野編著、二〇〇九、前掲書、土井「『個性的な自分』という強迫衝動」、二三四頁参照）。

内キャラは、「今の私」にとって先験的・生来的だと感じられる性質（幼少期の記憶やトラウマ等）に由来が認められると土井は述べる（浅野編著、前掲書、二〇〇九、土井隆義「『個性的な自分』という強迫衝動」、二三二頁、二三八頁参照）。それらは、「他者からの批判的な視点」を介さない、「絶対的な物語」として認識される。「意味内実」の梯子が外され、コミュニケーション能力の高低によってアイデンティティが決定される島宇宙において、自身の「存在理由」が見いだせない場合、内在し理想化された「絶対的な物語」は、空虚な〈私〉を支えるものとして、想起されるわけだ。

次に、そのような内キャラに縋らざるをえない人々の実存を、「自己物語論」に依拠して詳述を試みる。「内キャラ」とは、漠然とした自己認識から複雑性を縮減した、〈唯一無二の私〉である。内キャラは外部圧力を受けないため理想化され、肥大した〈承認されたい私〉として行為者に認識される。また、「内キャラ」と「外キャラ」は、「すでに自己構成した語り手」によって主観的認識の上では連続性を持つと捉えられるものの、「外キャラ」は外部圧力に晒されるため、内キャラがそのまま外キャラとして承認されるという事は基本的には無い。従って、「アイデンティティ」

という観点から鑑みると、それらが連続性を持っているとは言えない。

では、内キャラはいかなる内省メカニズムによって、〈絶対的な私〉のような固定的なものとして認識されるのだろうか。土井は内キャラについて、〈他者不在〉を前提とした「感情優位」によるパラドキシカルな自己認識に基づき成立すると言及している（浅野編著、二〇〇九、前掲書、土井「『個性的な自分』という強迫衝動」参照）。以下においてはその発想を参照しつつ、自己物語論、ミードの主我（I）と客我（me）概念の知見を取り入れ、より発展的な検討を加えたい。

自己物語論によると、「すでに自己構成した語り手」が、〈私〉を一つの物語として認識する事によってアイデンティティが形成される。それは、内キャラと外キャラのいずれをも対象とした「語り手による振り返り」によって構成される。これにおいて、他者が形成する島宇宙では、〈外キャラ〉が選択されるが、そうでない場においては、内キャラが選択される。

後者の過程においては、行為者にアイデンティティを齎す価値が多様化・不可視化・等価化したため、外部からベタに、「自己承認を齎す物語を調達する事」が困難となった。それにより、「〈私〉とは何か」という内省の際に、「社会的・他者的なもの」を介さずに、自己を省みる機会が増大した。従って、「すでに自己構成した語り手」における主我（I）は、相対的に、その時々の気分や感情の影響下に置かれる事となる。感情優位の主我（I）は、「社会的に構成された〈私〉」に基づいたIと比較すると、短期的なスパンで変動するため、「自己」に関する認識の触れ幅が大きくなる。しかしこの現象は「I」が帯びる性質なので、「自己を省みる瞬間」には対象化できない。一方でmeによる〈私〉への欲望は、他者・社会をベタに信頼しないがゆえに誇大的に理想化され、「固有性を帯びた先験的な私」を志向する事となる。

加えて、「自己目的化した関係」において承認欲求が満たせなかった人々は、相対的に他者不在の時間が増大するため、自己内省は、物理的な他者との相互行為（〈外キャラの提示〉）ではなく、「〈内キャラとの対峙〉」が優位となり、「固有性を帯びた絶対的な私」を志向する機会もまた増大すると考えられる。

以上に記した内キャラへの内省過程において、行為者の主体的認識（I）の上では「多元的な自己」が前提とされ、客体的認識（me）の上では「固定的な自己」を欲望するため、〈アイデンティティ・クライシス〉、つまるところ「自分探しの空転」が生じる。

八　結論

「多元的アイデンティティ論」の前提条件となる、七〇年代以降の我が国における社会意識の変化（近代的社会・文化集団が行為者の実存に齎す意味内実の多様化・不可視化・等価化）、及び、他者関係の変容（「自己目的化した関係性」を希求する欲望の前景化）は、大局的な観点において、概ね認められよう。

しかし、行為者、とりわけ生活世界の変化に最も敏感な若者の実存に焦点を当てた場合、彼・彼女達のアイデンティティのあり方は、多元的な自己を駆使して多様な島宇宙を行き来しているというよりも、一義的にコミットする場において「外キャラ」を駆使して刹那的な承認を得るか、もしくは、内省する場において絶対的な「内キャラ」を創造し社会・他者をアイロニカルにしか介さずに自己と向き合う、といった形で構成されていた。そして、それら外キャラと内キャラの解離こそが、今現在問われるべきアイデンティティを巡る問題系である事が、終章により示された。

それに焦点を当て分析を進めると、両者は単純に解離しているというよりも、「すでに自己構成された語り手」により「緩やかな統合性」を帯びつつ、場に応じて「外キャラ」、「内キャラ」が選択・表出され、「内キャラへの内省」においては、感情に左右され動的な〈認識する私〉と、固定的な〈認識される私への欲望〉による齟齬が確認できた。

一方、外キャラを駆使して「場」にコミットする事でそのような内省を一時停止させる事が、アイデンティティ戦略として、少なくない人々に採用されているとも考えられる。以上が、本稿によって得られた知見である。

九　後書き

本論においては、瀬沼、土井、本田らによる、「若者の〈アイデンティティ〉を巡る困難性」に焦点を当てた実証研究を、浅野、片桐らが先導する「自己物語論」を通して、再帰的近代化論や自我論を援用しつつ、「発展的に語り直す」という構成をとった。これによって、昨今の行為者の実存を踏まえた新たな理論的視座の獲得に、幾分かは貢献できたように思われる。一方で、文字数の都合上、定性／定量調査等を駆使した具体的なアプローチに踏み込む事はできなかった。

今後は、そのような課題をクリアした、実証的かつ学際的な研究が待ち望まれるだろう。

〈アイデンティティ〉なる言説は、たとえ「幻想」であったとしても、後期近代の生成する社会システムから遺棄された少なくない人々から、依然として切望されているように思われる。そのような「自己」を巡るミクロな力動を取

り溢さず、（不可能と知りながらも）全体社会への接続を引き続き希求して行く事が、現代社会学の意義であるように思われる。

註

（1）構成主義アプローチについて

ラディカルな構成主義アプローチは、「〈アイデンティティ〉に纏わる言説を取捨選択する自己」もまた、「脱構築可能な既成の言語」によって構成される、と捉える傾向が強い。しかしながら上野は、構成主義について、「行為者に外在する言語によって自己の一切が構築されるという信念を絶対視するのではなく、そのような視座すらも脱本質化するようなアプローチが求められている」と、言語活動も含めた脱本質化の重要性を指摘している（上野千鶴子、二〇〇一、「構築主義とは何か」、一五頁参照）。

（2）オタク

本論においては、『コミック、アニメ、ゲーム、パーソナル・コンピュータ、SF、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群の〈虚構性の高い〉サブ・カルチャーに耽溺する人々の総称。』を指し示す言説として定義している（東浩紀、「動物化するポストモダン　オタクから見た日本社会」、二〇〇一、八頁引用。〈〉内は、斎藤環、二〇〇〇、「戦闘少女の精神分析」、三三頁引用）。

（3）選択的コミットメント

浅野は、若者の交友関係を対象とした複数の定量調査の結果を元に、彼・彼女らの関係性について、「選択的コミットメント」という概念を用いて、三つの特徴を指摘している（浅野編著、二〇〇九、前掲書、浅野「親密性の新しい形へ」、二〇一頁―二〇二頁参照）。

①（意味内実が）限定された文脈の中でのみ関係が取り結ばれるので、他者と親密になるために包括的な人格の開示が必要とされない。

②参入離脱が自由なものとしていくつも並び立っており、また相互に無関連であるため、行為者の選択可能性が保証される。

③（意味内実よりも）関係を作っていく過程それ自体を楽しもうとする、即時充足的な志向性を持つ。

（4）SNS

SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）とは、インターネット上で他者とのつながりを構築する事ができるネット・コミュニティである。各々のプロフィールや写真、意見、思考、経験などを公開しあう事が、主なコミュニケーション方法となっている（船津衛、二〇一一、「自分とは何か―「自我の社会学」入門」、一一七頁―一一八頁参照）。

（5）「自己物語論」の理論的視座について

浅野の〈アイデンティティ〉を巡る考察においては、とりわけ〇〇年代後半以降、「若者のアイデンティティの多元化」を指摘する内容のものが増えたように思われる。しかし一方で、それを捉える枠組みとして、必ずしも構成主義に基づいた「多元論」を絶対視しているわけではなく、「多元化」現象をも包括的に捉えうる、新たな「自己物語論」の構築を模索していると考えられる（上野編、二〇〇五、前掲書、浅野「物語アイデンティ

ティを越えて?」参照)。それゆえに浅野は、幾度かにわたり「自己物語論」の概念整理・更新も試みているため、本論においては、適宜それらを参照している。

(6) 再帰的近代及び再帰的自己

A・ギデンズは、近代社会が発展していくに連れて、「専門知に基づいた抽象的システム(水道、電力、ガス、医療〈インフラ〉)」、及び会社、学校、専門的職業〈アソシエーション〉のような、「近代化を支えるシステム」は、次第に内的な「自己準拠性」を獲得していくという(〈再帰的近代〉)。それによって、我々が信頼を置いていたそれらのシステムは「不確かさ」を増していく事となる(ギデンズ、二〇〇五、前掲書参照)。「不確かさ」の増大は、日常生活がそれらに深く埋め込まれている行為者がアイデンティティを決定する場にも当然浸透するため、アイデンティティの準拠対象もまた、不確かなものとなる。このような「システムの再帰性」の渦中、行為者は、「再帰的解釈」によって「固定化された価値体系」を離脱しやすくなった事で、様々なライフスタイルが選択・再構築可能となる(ギデンズ、二〇〇五、前掲書、九二頁参照)。つまり、不確かな社会の中で、「マッチするもの」を自らピックアップして、アイデンティティを能動的に構築する事ができるようになるというわけだ(〈再帰的自己〉)。

(7) 秋葉原通り魔事件

二〇〇八年六月八日(日曜日)、東京・秋葉原で起こった連続殺傷事件。犯人Kは、多くの買い物客で賑わう歩行者天国に二トントラックで突入した。その後彼はトラックを乗り捨て、居合わせた人々を次々とダガーナイフで襲った。これによって死者七人、重軽傷者一〇人という犠牲者が出る事となり、戦後稀に見る大規模な通り魔事件となった(梨本敬法編、二〇〇八、「アキバ通り魔事件をどう読むか?」、一頁参照)。その犯行動機として、しばしば、不安定な雇用形態に起因する「生きづらさ」や「格差社会に対する復讐」が指摘されている。

(8) 見られる地獄と見られない地獄

濱野智史は、犯人Kの承認不安を捉える上で、「見られる地獄」と「見られない地獄」の混在を指摘した。「見られる地獄」とは、連続銃殺事件(一九六八年)を引き起こした永山則夫元死刑囚の動機を分析する際に見田宗介が提出した概念に由来し、『「身体の上に現れる諸特徴」及び「出生・出身地・学歴・肩書」といった「書類等に記載される抽象的な属性」によって、その人物が何者であるかが読み取られ、否応なしに決定されてしまう空間』(大澤、二〇〇八、前掲書、濱野「なぜKは「2ちゃんねる」ではなく「Mega-View」に書き込んだのか?—二〇〇〇年代のネット文化の変遷と臨界点をめぐって—」、一六四頁—一六五頁引用)において、ネガティブなまなざしが形成される〝地獄〟である。

「見られない地獄」とは、神戸市連続児童殺傷事件(一九九五年)を引き起こした酒鬼薔薇聖斗の動機を分析する際に大澤真幸が提唱した、「誰からも見られず、存在が無視される〝地獄〟」を示す。大澤はこれを、九〇年代以降の社会意識の特徴を捉える上で「見られる地獄」と対比的に論じたが、濱野はそれを前提としつつも、「Kは両方の不安を抱えていた」と述べる。

(9) 島宇宙

宮台真司が提唱した概念。狭義には、九〇年代以降の若者のコ

ミュニケーションのあり方を指す。彼・彼女達は、少人数の固定的なグループを形成し、グループ内において「仲間以外は皆風景」と言えるような排他的価値観を緩やかに共有している。広義にはポストモダン下における集団のあり方全般を指し示す（宮台真司、一九九四、「制服少女たちの選択」参照）。

文献

アービング・ゴッフマン、一九七四、『ゴッフマンの社会学①　行為と演技―日常生活における自己呈示』、石黒毅訳、誠信書房。

相原博之、二〇〇七、『キャラ化するニッポン』、講談社。

浅野智彦、二〇〇一、『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ』、勁草社。

浅野智彦編、二〇〇六、『検証・若者の変貌――失われた10年の後に』、勁草書房。

浅野智彦編著、二〇〇九、『リーディングス　日本の教育と社会　第一八巻　若者とアイデンティティ』、日本図書センター。

アンソニー・ギデンズ、二〇〇五、『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』、秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳、ハーベスト社。

東浩紀、二〇〇一、『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』、講談社。

井上俊、船津衛編、二〇〇五、『自己と他者の社会学』、有斐閣。

上野千鶴子編、二〇〇一、『構築主義とは何か』、勁草書房。

上野千鶴子編、二〇〇五、『脱アイデンティティ』、勁草書房。

宇野常寛、二〇一一、『リトル・ピープルの時代』、幻冬舎。

宇野常寛、二〇〇八、『ゼロ年代の想像力』、早川書房。

エリク・H・エリクソン、一九七三、『自我同一性――アイデンティティとライフサイクル』、小此木啓吾訳編、誠信書房。

大澤真幸編著、二〇〇八、『アキハバラ発〈00年代〉への問い』、岩波書店。

大塚英志、二〇〇七、『「おたく」の精神史――一九八〇年代論』、講談社。

樫村愛子、二〇〇三、『愛知大学文学会叢書Ⅷ「心理学化する社会」の臨床社会学』、世織書房。

片桐雅隆、二〇〇〇、『自己と「語り」の社会学――構築主義的展開』、世界思想社。

片桐雅隆、二〇一一、『自己の発見――社会学史のフロンティア』、世界思想社。

斎藤環、二〇一一、『キャラクター精神分析――マンガ・文学・日本人』、筑摩書房。

斎藤環、二〇〇〇、『戦闘美少女の精神分析』、太田出版。

ジグムント・バウマン、二〇〇七、『アイデンティティ』、伊藤茂訳、日本経済評論社。

ジグムント・バウマン、二〇〇八、『リキッドライフ――現代における生の諸相』、長谷川啓介訳、大月書店。

ジョージ・ハーバート・ミード、二〇〇五、『精神・自我・社会　復刻版』、稲葉三千男、滝沢正樹、中野収訳、青木書店。

スチュアート・ホール、ポール・ドゥ・ゲイ編、二〇〇一、『カルチュラル・アイデンティティの諸問題――誰がアイデンティティを必要とするのか?』、宇波彰監訳・解説、大村書店。

ジェームス・プロクター、二〇〇六、『スチュアート・ホール』、小笠原博毅訳、青土社。

ジュディス・バトラー、二〇〇八、『自分自身を説明すること――倫理的暴力の批判』、佐藤嘉幸、清水知子訳、有限会社月曜社。
ジョナサン・H・ターナー、二〇〇七、『ジョナサン・ターナー　感情の社会学Ⅰ　感情の起源　自律と連帯の緊張関係』、正岡寛司訳、明石書店。
瀬沼文彰、二〇〇七、『キャラ論』、精興社。
土井隆義、二〇〇九、『キャラ化する／される子どもたち――排除型社会における新たな人間像』、岩波書店。
中原学、一九九〇、『現代の青年と労働組合――「新人類」とは誰のことだ！』、学習の友社。
梨本敬法編、二〇〇八、『アキバ通り魔事件をどう読むか!?』、洋泉社。
能智正博編、二〇〇六、『〈語り〉と出会う――質的研究の新たな展開に向けて』、ミネルヴァ書房。
羽渕一代編、二〇〇八、『どこか〈問題化〉される若者たち』、恒星社厚生閣。
濱野智史、二〇〇八、『アーキテクチャの生態系――情報環境はいかに設計されてきたか』、ＮＴＴ出版。
船津衛、二〇一一、『自分とは何か――「自我の社会学」入門』、恒星社厚生閣。
船津衛編著、二〇〇六、『感情社会学の展開』、北樹出版。
本田由紀、二〇一一、『若者の気分――学校の「空気」』、岩波書店。
マイク・フェザーストーン、二〇〇九、『ほつれゆく文化』、西山哲郎、時安邦治訳、法政大学出版局。
宮台真司、一九九八、二〇一一、『終わりなき日常を生きろ』、筑摩書房。
宮台真司、一九九四、『制服少女達の選択』、講談社。
宮台真司、二〇〇九、『幻冬舎新書１２２　日本の難点』、幻冬舎。
森岡清美、塩原勉、本間康平編、一九九三、二〇〇六、『新社会学辞典』、有斐閣。
盛山和夫、土場学、野宮大志郎、織田輝哉編著、二〇〇五、『〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法（下）　経験知の現在』、勁草書房。